

お小遣い帳のススメ

東京都・お茶の水女子大学附属高等学校 1年 小山 百合香

「お小遣い帳をつける」というルールが私には課せられていた。これは、私が毎月決まった額の小遣いをもらい始めた小学3年生から中学3年生まで続いた。具体的な内容は、一冊のノートに「日付」「用途」「支出額または収入額」「残金」を記入していくシンプルなものだ。例えば、「4月1日」「4月分のお小遣い」「+1,000円」「残2,500円」といった具合だ。私はこの記録と財布の中身が合っていないとひどく叱られ、小遣いがもらえない。また、没収になってしまうため、私にとっては非常に面倒極まりないルールにしぶしぶ従い、うんざりしながらもどうにかこうにか記録を続けていた。ちなみに、小学生の時も中学生の時も私の周りにはこのような面倒なことをさせられている友人はほとんどいなかった。

高校生になり都内まで通学するようになると魅力的な寄り道スポットが私を待っていた。しかも中学生の時には校則で持ち物と認められていなかった財布がいつでも手元にあるのだ。新しい友人、行ったことのない場所、入学祝いで若干中身に余裕がある財布。このような好条件がそろってしまい、私は様々な誘惑に負けることになる。4月の1ヶ月、実際には入学式後の3週間だけで10回以上も友人と寄り道を楽しんだ。そして、1週間あるいは2週間に1度まとめてどうにかこうにか記録をしていたお小遣い帳なのだが、小遣いを使う機会が増えレシート発行されなかつたりすることが重なっていき、お小遣い帳と財布の中身は少しずつ、しかし確実にずれていった。記録がずれるほど、イライラすることはない。お小遣い帳さえなければ！この呪縛から逃れたい！

そこで私は周りの友人の意見を聞いてみようと考え、クラスの20名ほどに「小遣い帳つけているか」というアンケートをとった。結果、つけている人は0人だった。1人だけ、どのように使うかの計画を立てている人はいたが、いつ、何に、どのくらい使ったか、をいちいち記録している人は0人だった。小学校の時も中学校の時もそして高校に入ってもお小遣い帳をつけている人間がほとんど周りにいないこと、高校生なのだからもう小さな子供ではないのだろということを武器に、母に抗議してお小遣い帳チェックルールを撤廃してもらうことに成功した。

お小遣い帳をいちいち書くという煩わしい作業から解放されて本当に気持ちが晴れ晴れした。レシートがないからといって何かメモを残しておく必要もない。ずれる心配もなく良いし、なにより親に小言を言われないというのは素晴らしいことだ！「やはりお小遣い帳なんて必要ない！ない方がいい！」と純粋に思った。

しかし小遣い帳事情は早々にピンチを迎えることになった。やりたいことや欲しいものに対して財布の中身が確実に足りないのだ。そんなに出費が高んだ記憶もまるでない。小遣いの額だって中学生の時よりも増額してもらっている。潤沢にもらっているわけでもないが少ないわけでもない。お小遣い帳をつけているかどうか友人に聞いて回った際に小遣いの額も教えてもらったりして、自分の小遣いの額が特に不満もなく過ごしていた。

なぜ今までほとんどなかったようなピンチが頻繁に起きてしまったのだろうか。さすがに焦った私は小遣いの使い方を見直してみることにした。溜まっていたレシートを見たり、記憶を細々とたどってみると私の支出は大きく二つに分類される。一つは趣味だ。好きなアーティストのCDを購入したりライブに行くことが格段に増えた。また、軽音部の先輩のライブに参加するのもプロと比べたら少額だが確実に支出額を増やす原因の一つだった。もう一つは交際費だ。友人と食事をとったり買い物をするが増えた。気温が高くなってから何度アイスを手紙に語ったことだろう。1回の金額は数百円程度の小さな出費でも度重なれば大きくなる。塵も積もれば山となるを実体験したわけだ。小山百合香の小遣いにおけるエンゲル係数ははいったいどれだけ高いのだろう！ここまで支出が増えたことを述べてきたが前にも書いた通り、収入も増えている。1ヶ月当たりにもらう小遣いの額は中学生の時の2.4倍だ。出費が増えたとはいえ収入も増えていたのにピンチになったのか。考えを巡らせて気がついたことが「お小遣い帳の存在」である。今まではお小遣い帳で残金をこまめに確認し、正確に財布の中身を把握することができていたし、使いすぎなどもひと目でわかったので上手にやりくりができていたのだ。今後の予定なども考慮した上で、あとどのくらいなら使えるか計画を立てるという作業を無意識にできていた。

だらしない自分の消費生活を見直し落ち込んでいるとき1つ思い出した言葉があった。「私はあなたに好きなことをさせてあげるためだけにお小遣いをあげているわけじゃない。限られたなかでやりくりするようなお金の使い方を考える機会をもつためという意味もあるのよ」。これは昔小遣いが足りない抗議した私に対して母が言ったものだ。そのときは、また、反論しにくくなることを言われた、やりこめられた、言いくるめられた、としか思わなかった。しかし今回の一連の事柄を経てこの言葉に深く納得した。そして、お小遣い帳を強制的につけさせられていた意味もわかった。いい歳して自律できていないだけではないか、と言われればそれまでだが、確かに小遣い帳をつけている意味はあったのだ。念のために書くが、私は趣味や友人と過ごす時間にある程度のお金はつきものだろう。大切なことは、小遣いの中で上手にやりくりすることだ。

この結論にいきた私はこちらでタイトルにあるように「小遣い帳をつける」ということを薦める。毎回つけるのは確かに面倒ではあるが記録して、検証することで自分の消費傾向がわかり、そこから無駄がわかるようになる。無駄、つまり改善点が明確になれば自分の消費行動に対策を立てることができる。よって、賢い消費者に変貌できると期待できる。

義務教育を卒業して、羽を伸ばしすぎた4月からの3ヶ月間を反省した私は義務であったお小遣帳も卒業し、スマートホンのアプリで自主的に自己管理するようになった。その場ですぐに書き留められるので、とても便利なのに加え、綺麗にまとめてくれるので格段に見やすくなった。私と同じような小遣いという局地的な経済活動で、先述のような憂き目を経験されたことのある方はぜひ、3ヶ月ほどお小遣い帳をつけてみてほしい。